

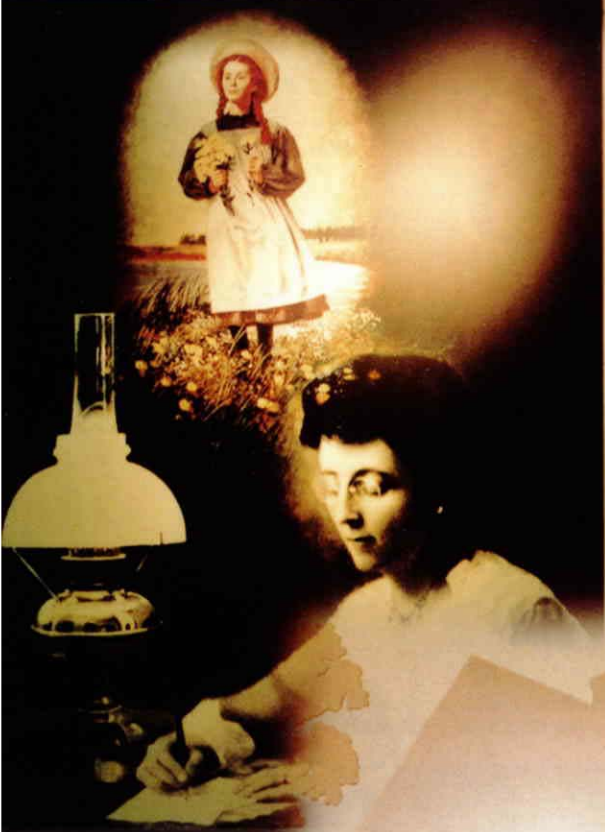


カナダと日本を結ぶコミュニケーションプレス

# メイプル

## 東北

Vol.13



### 物語の世界そのままに 少女たちの永遠の憧れ「アンの家」

今でも世界中の人々に愛されている『赤毛のアン』。  
その昔、波間に浮かぶゆりかごの島と称されたプリンス・エド  
ワード島には、まさしくアンの家 (Green Gables House)  
があります。ここは本の挿し絵から抜け出たような、白い壁に  
緑の切妻屋根の家。作者のモンゴメリーが少女時代に遊んだ  
家とされています。  
インテリアは小説の通りに再現され、扉を開けるとアンやマシ  
ューが笑顔で迎えてくれそうです。





# NEWS

## ●平成9年度定時総会が開催

7月22日、仙台市において東北日本カナダ協会の平成9年度の定時総会が開催されました。今年度の総会には、カナダ大使館から、キャンベル駐日カナダ大使(現カナダ連邦政府外務次官)以下4名のご出席をいただきました。

会員62名が出席した総会では、明間会長の議事進行により、平成8年度決算の報告、平成9年度事業計画並びに事業予算、役員の新任、定款の一部変更についての議案が承認され、閉会いたしました。

定時総会後には、カナダ大使館の二等書記官デボラ・ポール氏による「多民族国家カナダ」と題した講演が行われました。講演では、歴史的背景、民族構成や言語状況などに触れながらカナダ社会を概観し、さらにカナダ国家が、そのような多様性にどのように取り組んでいるのかについてお話されました。

定時総会後、恒例の懇談パーティでは、会場のあちこちで笑い声が聞こえるなど、会員同士の交流が深められました。



▲キャンベル駐日カナダ大使に記念品を贈呈する明間会長



▲盛り上がりを見せた懇談パーティの様子



▲示唆に富んだデボラ・ポール氏の講演

### ■平成9年度事業計画■

- ・『国際ゆめ交流博覧会』への出展【7月～9月】
- ・総会および講演会の開催【7月開催】
- ・『音楽のタベ』の実施【11月4日 18:00～ 於:仙台国際ホテル】
- ・『赤毛のアン』映写会【11月30日 於:東北電力グリーンプラザ】
- ・クリスマスパーティの実施【12月15日】
- ・赤毛のアン展示【12月開催 於:東北電力グリーンプラザ】
- ・講演会や展示会に対する後援
- ・会員への情報提供サービスの充実、など

## 名誉領事館が開設

6月17日、在仙台カナダ名誉領事館が電力ビル内に開設されました。

昨年12月に明間会長がカナダ名誉領事に就任したことに伴うもので、名誉領事館では東北とカナダの友好・通商関係促進の業務、東北在住カナダ国民を対象とした公証関連業務などを行います。

開館日は、火曜日と木曜日の13:30～17:00まで。

### ホームページ開設へのご協力のお願い

東北日本カナダ協会では、会員の皆様のご協力をいただきながら活動を盛り上げていきたいと考えています。

協会では、広く一般の皆さんに協会の活動を知っていただくため、インターネット、ホームページの開設を準備いたしますが、会員の皆様の中で、HP開設に関心のある方、ご協力いただける方を募集します。

ご連絡は協会事務局まで。





## ●国際ゆめ交流博覧会

皆さんは、国際ゆめ交流博覧会の東北日本カナダ協会のブースをご覧になりましたか？

7月19日から9月29日まで、仙台市宮城野区港地区で開催された『国際ゆめ交流博覧会』に、東北日本カナダ協会の活動を紹介するブースを展示いたしました。人の交流ゾーン「コミュニケーション・ミルキーウェイ」には、当協会のほか、60もの交流団体・市民による活動内容や成果などが紹介されていました。

当協会のブースには、クリスマスパーティやカナダツアーの写真、カナダの州旗や産品を展示したほか、ビデオでカナダを紹介いたしました。その効果あってか、事務局には、故郷（第二の故郷も）への郷愁にかられた方々から数多くの入会の問い合わせがありました。

東北日本カナダ協会は、今後も、協会の活動やカナダについて様々な場所で紹介していきたいと考えています。

▶東北日本カナダ協会のブース



## ●カナダディ

7月1日、恒例のカナダディを祝う会が東北電力福祉センターで開催されました。当協会幹事の倉成正也さんが中心となって平成7年より始めたこのイベントは、在仙のカナダ人と日本人の交流の場となっています。

今年も日本人25名、カナダ人12名がこの日を祝うために集い、楽しい時を共に過ごしました。最後には、参加者全員で「オー・カナダ」を熱唱し、盛会のうちに閉会いたしました。



## ●黒田副会長が 山形日・力協会総会で講演

去年のカナダツアーには団長として参加されるなど、カナダと深い関わりをお持ちの黒田副会長が、8月23日の山形日・力協会の総会で「カナダと私」と題して講演を行いました。

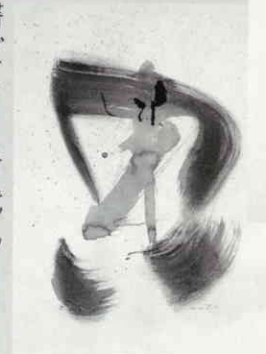


## ●Canadian&Japanese Culture ～カナダと日本をつなぐ「波」



▲左から2人がコテ氏、4人が佐々木氏

7月4日～13日、宮城県小牛田町近代文学館にて、小牛田町在住の書家 佐々木守邦氏とカナダ・ビジュアルアーティストのミッシェル・コテ氏による「国際交流二人展」が開催されました。「波」をテーマにした今回の二人展の代表作品をここにご紹介いたします。



▲コテ氏の「波」



▲佐々木氏の「波」



## 「カナダへのノスタルジア」 大原一治

アン・シャーリー（架空の少女であるが）が生まれ、そして期待と不安に胸を躍らせながら、早春の肌寒いフェリー乗り場から、赤毛のアンの島、プリンス・エドワード島へと渡る。その地がカナダの大西洋岸に面したノバスコシア州であった。初夏は殊のほか爽やかなすがすがしいその地に4年程住む事になったのだが、厳しさもひとしおの、"冬"もまた趣の有る物であった。ある年の、X'masカードに、こんな事を書いていた。

……また、当地には銀世界が舞い戻ってきました。教会の多い街、どんな集落にも、こじんまりとした小綺麗な教会が有り、とくに水辺に映る姿は絵になります。かつて、新大陸を求めてこの地に住み着いた人々も、それなりに宗派、国、故郷、が在りCOMMUNITY毎に心の拠り所として、また安らかに眠りに就く場所として、在るのでしょう。そのGRAVEYARDも、すっかり綿帽子を被ってしまいましたが、四季を通じてみる限り、雪の中から薄緑の気配を感じ、ライラック、アンの愛したスノークイーンの花に埋もれ、緑の木陰に覆われ、そして降りしきる色とりどりの落ち葉に囲まれる、何ともゆったりした墓場に「羨ましいねえ、そんな緑豊かな環境で、ゆっくり眠れるなんてさ！ 骸骨姿で踊りだしたくなるのも分かるような気がするよ！」と、声でも掛けたくります。こじんまりした我が家にも、暖炉があります。夏の終わりに一戸建ての家に引っ越ししました。アルファベットも満足に書けなかった、娘も英語の宿題を自分でこなして、友達と遊びまわっているのを見ると、人間なんとかなるものだなあ、と、感心したりしております。銀世界の中で、家々を飾るクリスマスのイルミネーションは、あたかも横手の「かまくら」に似た幻想の世界です。春へ向けての長い冬が訪れましたが、冬の生活もまた、楽しみたいと思います……………

新聞情報は一週間ほど遅れてきますが、政情を見るにつけ、大国のリーダー諸氏は本当に安らかな気持ちを持っていることが在るのだろうか、何か人間の原点を忘れていたのではなかろうか、と、大西洋の片隅の、あまりEXCITINGなこと、大きな変化、発展も特に無い当地で思うこのごろです。……………

一週間遅れの情報も別に大勢に影響は無かった、車も人優先である。歩行者も止まってくれた車に微笑みを返す。そのちょっとした人の触れ合いが何とも良かった。情報も、目的地に早く着く事も、大切な事もあろう。しかし、ただそれだけが人生でない事を、あのカナダのゆったりしたペース、時の流れが心に染みた。東北にはそれがある、私は生涯の拠点を、この地に選んだ。良かったと思う。ただ、都会の中に入れば入るほど、カナダの、あの時の流れにノスタルジーを感じるこのごろである。



## 「Enjoy Rugby in CANADA」 阿部義明

私はラグビーの親善試合のため、カナダのバンクーバーを訪れました。そこで、まず私の目に飛び込んできたものは、とても大きな芝のグラウンドと雰囲気のあるクラブハウスでした。カナダのほとんどのラグビーチームがそのような環境にあるということを知り、うらやましく思いました。

試合が終わると歓迎パーティが行われ、ステーキやサーモンなど食べきれない程の料理を楽しみ、またビールのいっき飲みレースで最高に盛り上がりました。

その夜は、相手チームの選手の家でホームステイをすることができ、カナダの生活の一面に触れることができました。

今回のカナダ旅行では、今までにない貴重な経験ができ、とてもカナダが気に入りました。親しみやすいカナダの人々と、あの青々とした芝のグラウンドで、再びラグビーができることを楽しみにしています。ラグビープレイヤーのみなさん、カナダの自然の中でラグビーをenjoyしてみたいはいかがでしょうか？

## 「Canadian thoughts from Japan」 Ms. Cherie Thiessen (Sendai Ikuei Gakuen)

Why would anyone choose to live abroad? Initially it's disorienting, frustrating, confusing and debilitating. Whether one is a 16 year old student leaving home for the first time on a year's educational exchange or a 50 year old ESL teacher on her fourth overseas job, the experience is the same at first.

But it doesn't last. In the struggle to decode a new set of symbols and to learn a new language, to become accustomed to new rules, routines and traditions, and to meet new people, the first unsettling reactions are replaced with new ones, as positive as the former were negative.

Why do we do this? Because we travel in rarefied air, meeting the uncommon people - the ones who, like us, are willing to replace familiarity and security with change and intensity. Because life hands us a blank sheet of paper on which we can write our life all over again, and because life is lived so fully when the routine is broken, when our senses are shocked totally awake again. Working abroad keeps us vitalized, challenged, and compassionate. Once you have put yourself in a position of need in a strange country, you can never again look at a foreign visitor in your own country in quite the same way.

As an example, years ago in my Canadian home, I can remember frequently being annoyed by what appeared to me to be the strident, harsh tones of the Mandarin language, which I heard often. "Why don't they speak more softly?" I'd think "Why, in fact, aren't they speaking English!"

Then, I went to teach in China and came to appreciate the often unselfish and kind nature of the Chinese. Now whenever I hear Mandarin spoken, I recognize it immediately and smile. I love the dipping tones of the language and wonderful memories that come wrapped up in those musical tones. That's why I believe so strongly in the concept of globalization, and in the international approach perhaps pioneered in Japan by Sendai Ikuei Gakuen and its founders. In Canada we used to call a similar concept "keeping the world hostage". If every country in the world is hosting international visitors, no country will attack another.

I come from a sleepy little Gulf Island located midway between the busy city of Vancouver, and the capital of British Columbia, Victoria, on Vancouver Island. Pender Island has a permanent population of 2000 and is primarily a summer vacation or weekend spot for businesspeople from Vancouver and Victoria. My partner and I live on a forested acre in a tiny little house, and the only sound we hear at night are the owls on the roof or the frogs. So one of the first contrasts I noticed about settling in Sendai, was the noise. And while Karaoke sounds brilliant when you're participating in it after having downed five beers, it's quite another matter when it's right below your bedroom! With stoic calm the Japanese seem to be able to accept this onslaught of barking dogs in stereo from almost every corner, souped up motorcycles and cars on Saturday night dragging past with radios on full blast, 6AM Sunday morning vendors in cars with microphones, a cacophony of music blasting at them from every shop they enter, and the ever present clanging bells of the trains that speed by every few minutes for most of the day and night.

So an additional challenge for us has been trying to adopt the Japanese serenity over noise. But Japan is a country of contrasts and special, unlooked-for moments of peace can come upon you like gifts. On the islands, in the Shinto Shrines and Buddhist temples, or in a tranquil private garden suddenly opening up before you on a busy street.

We've all heard of the big differences between western informality and Japanese tradition and culture, and these differences can be daunting to a casual and imperfect personality like mine, but I'm trying. I have a few adventurous (and tolerant) Japanese friends with a sense of humour who are willing to come to dinner occasionally and brave the unexpected. Japan is a country of festivals, and to a Westerner, this is a great delight.

The regional foods, rituals, dances and festivities of Japan contrast starkly with the commercial holidays of Canada and the paucity of Canadian folk culture.

Life back home on Pender Island is peaceful, gentle, unhurried, and pristine. My partner and I have espoused a growing trend there, "Voluntary simplicity", a gentler way of living on the earth. Here that "voluntary simplicity" is a way of life, not a trend: two rooms instead of seven, a bike instead of a car, drying poles instead of dryers, sinks instead of dishwashers. So life in my corner of Japan is busy, energizing, full of contrasts, and full of lessons. And my latest lesson is that it's impossible to be arrogant when you keep shifting the centre of your world.

